

天が開けて

ヨハネの福音書 1章 43-51 節

はじめに

月の第一週の説教は、「ヨハネの福音書」からお話することになっています。先月も同じ箇所を学びましたが、今回はもう少し詳しく学んでいきたいと思います。この聖書箇所は、イエス様がピリポとナタナエルを弟子とするという出来事が書かれています。

イエス様にはすでに三人の弟子がいました。ペテロとその兄弟アンデレともう一人です。このもう一人の名前は出てきませんが、伝統的には、この「ヨハネの福音書」を書いたゼベダイの子ヨハネであったとされています。

1. 来て、見なさい

イエス様は、「ガリラヤ地方」に行こうとされていました。イエス様は、バプテスマのヨハネに会うために、ヨルダン川の川向こうまで来ていたので、ご自分の町であるナザレがある「ガリラヤ地方」に帰ろうとされていたのです。

そこで、ピリポを見つけて、「**わたしに従って来なさい**」とイエス様ご自身から声をかけられたのです。44 節を見ると、ピリポは「**ベツサイダの人で、アンデレやペテロと同じ町の出身であった**」とありますから、もともとアンデレやペテロと知り合いであったのかもしれませんが。そしてすでに、アンデレやペテロからイエス様について聞いていたのかもしれませんが。いずれにしても、イエス様のほうからピリポに声をかけて、「わたしに従って来なさい」といわれ、ピリポはイエス様の弟子となったのです。

するとピリポは、早速、伝道を始めるのです。余程、イエス様に会い、イエス様に声をかけられたのが嬉しかったのでしょう。なぜピリポは、こんなにも喜んだのでしょうか。それは、45 節を見ると分かります。「**私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです**」。ユダヤ人たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている「メシア」（救い主）を待ち望んでいたのです。彼らは、旧約聖書を「律法と預言者」と表現します。彼らは、旧約聖書で約束されている「メシア」（救い主）を待ち望んでいたのです。その「メシア」（救い主）は、「神の子」であり、「イスラエルの王」であると信じられていたのです。

そして、ピリポは、その旧約聖書で約束されていた「メシア」（救い主）こそ、「わたしについて来なさい」と自分に声をかけてくださったイエス様であると信じたのです。

旧約聖書は 39 巻から成る書物ですが、その中心はイエス様です。旧約聖書は、イエス様を預言し、イエス様を指し示す書物です。一方、新約聖書は 27 巻から成る書物ですが、そ

の中心もイエス様です。新約聖書は、イエス様の活動とイエス様の弟子たちの活動が書かれている書物です。旧約聖書も新約聖書も、その主人公はイエス様なのです。聖書全体は、イエス様について書いているのです。

ピリポは、イエス様に出会った喜びを、ナタナエルに伝えます。「私はメシア（救い主）に会った。それは、ナザレのイエスだ」と。ナタナエルという人は、「ヨハネの福音書」にしか出てきません。ナタナエルは、21章にもう一度出てきますが、そこでは「**ガリラヤのカナ出身**」とだけ書かれています。ナタナエルは、イエス様、そしてアンデレ、ペテロ、ピリポと同じように、「ガリラヤ地方」の出身であったのです。

ナタナエルは、ピリポから「私はメシア（救い主）に会った。それは、ナザレのイエスだ」と聞くと、こう答えます。「**ナザレから何か良いものが出るだろうか**」。ナタナエルは、ピリポの言葉を信じられませんでした。ナタナエルは特に、「メシア」（救い主）がナザレの人であることに疑問を持つのです。ナタナエルは、カナの出身で、同じガリラヤ地方のナザレをよく知っていたでしょう。ナザレはおそらく小さな田舎町ですから、偏見もあったのかもしれませんが。また旧約聖書には、「メシア」（救い主）がナザレから生まれるなんてことは書かれていません。むしろベツレヘムから生まれると書かれています。ナタナエルは、旧約聖書をよく読んでいたのかもしれませんが。そうであるならば、ナザレの人が「メシア（救い主）」であるはずはないと思ったのでしょうか。いずれにしても、ナタナエルはピリポの言葉が信じられないのです。

では、ピリポはこの後、ナタナエルにどのように伝道したのでしょうか。彼は、ナタナエルと議論したり、無理に説得することはしませんでした。ただ一言だけ、ナタナエルにこう言うのです。「**来て、見なさい**」。ピリポは、自分が説明するより、実際にイエス様に来てもらったほうが良いと考えたのです。ピリポは、言葉で語るより、実際に経験してもらうほうが良いと考えたのです。

2. **ピリポがあなたを呼ぶ前に**

ナタナエルは、ピリポに言われて、イエス様に会いに来ます。するとイエス様は、ナタナエルを見て、こう言われるのです。「**見なさい。まさにイスラエル人です。この人には偽りはありません**」。イエス様は、ピリポには偽りがないと言われるのです。偽りがあるかないか、その人が真実か嘘をついているかは、見た目では分からないものです。その人の心の中まで見なくては分からないものです。

そこでナタナエルは、「**どうして私をご存じなのですか**」とイエス様に言います。なぜ私が、偽りがあるかないかが分かるのですか。私の一体何が分かるというのですかと言うのです。するとイエス様はこう答えます。「**ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見ました**」。イエス様は、ピリポがナタナエルを呼ぶ前からナタナエルを見ていた、ナタナエルを知っていたと言われるのです。「あなたがわたしを知る前から、わたしはあなたをずっと知っていた、あなたがわたしを見る前から、わたしはあなたをずっと見ていた」と言

われるのです。

イエス様は、ナタナエルが「いちじくの木の下」にいるのを見ていました。「いちじくの木の下」というのは、「御言葉を学ぶ場所」であったようです。いちじくの木は、大きな葉が茂り、その木の下では涼むことができたようです。ですから、いちじくの木の下で律法の教師が弟子たちに御言葉を教えていたようです。ナタナエルがいちじくの木の下にいたというのは、ナタナエルが御言葉を真剣に学ぶ人であったのかもしれませんが。御言葉を心から求める人であったのかもしれませんが。だからこそ、ナザレからはメシア（救い主）は生まれないと知っていたのかもしれませんが。また御言葉を真剣に学ぶ人、求める人であったから、イエス様はナタナエルを「偽りがない」「本当のイスラエル人だ」と言われたのかもしれませんが。

いずれにしてもナタナエルは、自分はこのナザレのイエスという人に、ずっと前から知られていた、ずっと前から見られていたということが分かったのです。そして心に偽りがあるかないか、そういう心の中までも知られ、見られている方がここにいるということが分かったのです。そこでナタナエルは、イエス様を信じてこう言うのです。**「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」**。ユダヤ人は、「メシア」（救い主）は「神の子」であり、「イスラエルの王」だと信じていました。その意味で、ナタナエルは、ピリポと同じように、旧約聖書で預言されていた「メシア」（救い主）と信じたのです。

ナタナエルは、ピリポからイエス様について聞いただけでは、イエス様を神の子、救い主とは信じられませんでした。ピリポに、「来て、見なさい」と言われて、イエス様に実際に会って、初めてイエス様を信じることができたのです。それは、イエス様がずっと前から自分のことをすべて知って、ずっと前から見ておられる方であることが分かったからです。

私たち人間は、有限ですから、人のことをすべて知っているわけでも、いつでも見ているわけでもありません。もし私たちのことをいつでも見ている、私たちのことを何でも知っていて、私たちの心の中までも知っているとしたら、それは神様以外の何ものでもないのではないのでしょうか。旧約聖書の詩篇 139 篇には、こうあります。**「主よ、あなたは私を探り、知っておられます。あなたは、私の座るのも立つのも知っておられ、遠くから私の思いを読み取られます。あなたは私が歩くのも伏すのも見守り、私の道のすべてを知り抜いておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそのすべてを知っておられます」**。

神様は、私たちのすべてを見ておられ、私たちのすべてを知っておられます。心の中までもすべてを知っておられます。私たちが神様を知る前から、ずっと私たちを見て、知っておられたのです。

3. 天が開けて

しかしイエス様は、50 節でナタナエルにこう言われます。**「あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったから信じるのですか。それよりも大きなことを、あなたは見るようになります」**。イエス様はナタナエルに、「わたしがあなたをずっと前から見ていて、ずっと前から

知っていることに驚いてはならない、あなたはもっとスゴイことを見ることになる」と言われるのです。

では、イエス様が言われるもっとスゴイこととは何でしょうか。51 節を見てみましょう。**「まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見るようになります」**。イエス様はここで、「あなたがたは見るようになる」と言っています。ここで言われていることは、ナタナエルだけが見ることではありません。ナタナエルと同じように、イエス様を「メシア」（救い主）と信じるすべての人が見ることです。それは、「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」ということです。つまり、イエス様によって、私たちに天国の門が開かれるということです。イエス様は、イエス様を信じる私たちに、天国の門を開いてくださったのです。イエス様はこう言われました。**「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」**(ヨハネ 14:6)。イエス様が、天国と地上を結び梯子となってくださって、父なる神様がおられる天国にまで私たちを導いてくださるのです。

天国とは何でしょうか。それは、父なる神様とイエス様がおられる所です。天国に入る時、私たちは罪とあらゆる苦しみから解放されます。そして魂が全く聖くされ、父なる神様とイエス様の御顔を仰ぎつつ栄光に満ちた深い交わりを経験するのです。そして世の終わりの身体の復活を待ち望むのです。

この「天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」というのは、創世記 28 章に出てくるヤコブが見た夢を思い出させるものです。ヤコブは、旅の途中、石の枕で寝ていた時、天に届く一つの梯子を夢で見たのです。その梯子には神の御使いが上り下りしていたのです。まさにイエス様がナタナエルに語ったのと同じ情景です。その時、神様はヤコブにこう言われたのです。**「わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」**(創世記 28:15)。神様はヤコブに、「約束を必ず成し遂げる、その約束を成し遂げるまで、わたしはあなたとともにいて、あなたを守り、あなたを決して捨てない」と言われるのです。

イエス様はなぜ、このヤコブの夢を思い出させるような言葉を語ったのでしょうか。それは、イエス様を信じる私たちにも、神様がヤコブに語った言葉を思い出させるためだったのではないのでしょうか。イエス様を信じる私たちは、天国が約束されています。イエス様が私たちのために、天国の門を開いてくださったからです。イエス様を信じる私たちの国籍は天にあります(ペリピ 3:20)。私たちは、この地上においては「旅人」に過ぎません(1ペテロ 2:11)。私たちは、「天の故郷」(ヘブル 11:16)を目指している旅人です。その私たちに、神様はこう語りかけているとイエス様は言おうとされたのではないのでしょうか。

「約束は必ず成し遂げる、天国までの道のりまで、わたしはあなたとともにいて、あなたを守り、あなたを決して捨てない」と。天国まで、神様が私たちを守り、共にいて、私たちを決して捨てないと言われます。これが、私たちが経験する、もっとスゴイことなのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、私たちが生まれる前から、私たちを知っておられる方です。そして私たちの人生のすべてを見ておられます。私たちの心の中まですべて知っておられます。そんな方は、あなた以外におられません。あなたこそ、真の神です。

あなたが遣わされた御子イエス様は、私たちの罪のために十字架に架かり、復活され、天国の門を私たちに開いてくださいました。しかし天国への旅路は、まだまだ険しく長く続きます。その旅路において、あなたがいつも共にいて、私たちを守ってくださることを信じさせてください。あなたが決して見放さずにいてくださることを信じさせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。